

15世紀ロンドンにおける「外国人」：出身地と居住地から

著者	上野 未央
雑誌名	大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要
巻	21
ページ	5-19
発行年	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006860/



15世紀ロンドンにおける「外国人」 —出身地と居住地から—¹

上 野 未 央

キーワード：外国人、都市史、ロンドン、中世イギリス、都市社会

はじめに

中世のロンドンは、ブリテン諸島の各地やヨーロッパ大陸から、多様なモノや人、情報の集まる場であった。中世ロンドンの経済について論じたパメラ・ナイチンゲールは、14世紀後半から15世紀のロンドンには海外交易による富が集中し、ロンドンに到着した輸入品はそこから地方へ運ばれるようになったと述べている²。その中で、海外交易に携わった商人たちに加え、職人や芸人なども各地からロンドンにやってきた。15世紀に「外国人」に課された臨時税の税額査定記録を刊行したジョン・ボルトンは、当時のロンドンにはおよそ3500人の「外国人」が居住しており、その割合は人口のおよそ6%であったと推察している³。

中世の「外国人」に注目することは、ロンドンの都市社会を「外」との接点という視点から見直すことにつながるのではないか。本稿では、ロンドンにおける「外国人」の活動について具体的に明らかにするための第一歩として、彼らがどこから来て、市内のどこに居住したのか、その概要を示すことを目的とする。

-
- 1 本稿はJSPS科研費JP16K03123の助成を受けたものである。本稿執筆に先立って、2018年4月、九州西洋史学会にてシンポジウム「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」を行い、以下の研究発表を行った。上野未央「15世紀ロンドンにおける「外国人」—出身地・居住地・職業—」『西洋史学論集』第56号（2019）、pp. 1-8。また、2018年5月にはヨーロッパ中世史研究会において「中世後期ロンドンにおける「外国人」—最近の研究動向から—」と題して研究報告を行った。シンポジウムと研究会におけるコメントやご意見に感謝申し上げる。本稿は、これらの研究報告をもとに、内容を大幅に加筆・変更したものである。
 - 2 Nightingale, P., 'The Growth of London in Medieval English Economy', in Britnell, R. and Hatcher, J. eds., *Progress and Problems in Medieval England* (Cambridge, 1996), pp. 89-106.
 - 3 Bolton, J. L. ed., *The Alien Communities of London in the Fifteenth Century: The Subsidy Rolls of 1440 and 1483-4* (Stamford, 1998), pp. 8-9.

中世イングランドにおける「外国人」に関しては、2012年～2015年に、ヨーク大学・イギリス公文書館・シェフィールド大学人文学研究所の共同研究プロジェクト England's Immigrants 1330-1550 : Resident Aliens in the Late Middle Ages が行われた。このプロジェクトでは、様々な史料に残る「外国人」についての調査が行われた。その成果として、2015年からウェブ上にデータベースが公開されている（以後 England's Immigrants データベースと記す）⁴。データベースの公開以来、主に当該プロジェクトに関わった研究者たちによって研究成果が次々と発表されてきている。筆者は2016年に中世ロンドンの「外国人」に関する研究動向をまとめたが⁵、本稿では、それ以降の研究も加えて「外国人」研究の最近の動向を見る⁶。その中で、England's Immigrants データベースについても紹介したい。その上で、本稿の後半では、England's Immigrants データベースと、他の研究成果を合わせて利用することで、15世紀ロンドンにおける「外国人」の出身地と居住地について見ていくこととする。

1. 中世イングランドにおける「外国人」に関する研究動向

1.1 「外国人」というカテゴリー

まず、「外国人」とは誰かという問題をあらためて整理する。中世イングランドで「よそ者」を指して用いられた語には strange、foreign、alien などがある⁷。これらの語の用例について、イングランド議会の記録（The Parliament Rolls）をもとに整理したウィリアム・ロズウェルは、strange と foreign は「よそ者」一般を指して用いられたが、alien は14世紀半ば以降「イングランド以外の地域の出身者」を指して用いられることが多かったと述べる⁸。ロズウェルが指摘したような、中世後期イングランドにおける alien という語の使われ方については、研究者の間では大筋で意見が一致している。たとえば、England's Immigrants プロジェクトにおいて中心的役割を担ったマーク・オームロッドとジョナサン・マックマンは、2017年の論文において、「イングランド以外の地域で生まれた人」が

4 England's Immigrants 1330-1550 : Resident Aliens in the Late Middle Ages (<https://www.englishimmigrants.com/>, 2019年12月20日参照).

5 拙稿「中世後期ロンドンにおける「外国人」をめぐって」『大妻比較文化』17 (2016), pp. 35-54.

6 筆者は2019年9月にエクセター大学で開催された The Fifteenth Century Conference に参加した。この学会では 'Alien Communities in England' と題したセッションが行われ、ロンドン、カンタベリー、エクセターの「外国人」に関する研究報告がそれぞれ行われた。「外国人」研究はイギリスにおいて近年盛んになっているように思われる。

7 Rothwell, W., " 'Strange', 'Foreign', and 'Alien': the Semantic History of Three Quasi-synonyms in a Trilingual Medieval England", *The Modern Language Review*, vol. 105, No.1 (2010), pp. 1-19.

8 Ibid., p. 18.

alienとされたと述べている⁹。オームロッドらは2019年の研究書においては、上記の定義に加えて、「イングランド王の臣民でない人」に対してalienという語が使われることが多かったと述べる¹⁰。2019年に中世後期ロンドンの「外国人」と同職ギルドについて検討したマシュー・デイヴィスは、alienとは「イングランド王国の外で生まれた人」を指した語であり、foreignとは区別されていたと述べる。デイヴィスによれば、中世のロンドンにおいてforeignは、「ロンドン以外の地域から来た人で、ロンドンの市民でない人」を指して使われることが多かった¹¹。

これらの先行研究を踏まえ、本稿では「イングランド以外の地域の出身者」を「外国人」と呼ぶ。彼らは、史料上でalienとされることが多かった。

さしあたって以上のように「外国人」の範囲を設定したが、実際に誰が「外国人」とされたのかは、時と場合によって変わったことには注意が必要である。たとえば、オームロッドらも指摘するように、海外生まれであったとしても王家の人々が「外国人」とみなされることはほとんどなかった¹²。また、「外国人」の曖昧さは、彼らを対象として作成された文書群からも分かる。13世紀末以降のフランスとの断続的な戦争の中で、イングランドに居住したフランス人の中には、尚書部から開封書状（保護状letters of protection）を得る人々が現れた¹³。このような保護状は、14世紀から16世紀にかけて、フランス人だけでなく様々な「外国人」に対して出された。その中にはヨーロッパ大陸のイングランド王の支配領域から来た人々もいたのである¹⁴。イングランド王の支配領域の出身であっても、「外国人」として扱われる可能性が考慮されたものと推察される。「外国人」商人について論じたヘレン・ブラッドリーが指摘したように、「イングランド王の支配領域の出身である」ことは「イングランド人である」ということを必ずしも意味しなかった¹⁵。

-
- 9 Ormrod, W. M. and Mackman, J., 'Resident Aliens in Later Medieval England: Sources, Contexts, and Debates', in Ormrod, W. M., McDonald, N. and Taylor, C. eds, *Resident Aliens in Later Medieval England*, Studies in European Urban History 42 (Turnhout, 2017), pp.1-32, esp. p. 5.
- 10 Ormrod, W. M., Lambert, B. and Mackman, J., *Immigrant England, 1300-1550* (Manchester, 2019), pp. 1-11.
- 11 Davies, M., 'Aliens, Crafts and Guilds in Late Medieval London', in New, E. A. and Steer, C. eds., *Medieval Londoners: Essays to Mark the Eighties Birthday of Caroline M. Barron* (London, 2019), pp. 119-47, esp. p. 119.
- 12 Ormrod, Lambert and Mackman, *Immigrant England*, pp. 13-14.
- 13 Ormrod and Mackman, 'Resident Aliens in Later Medieval England: Sources, Contexts, and Debates', p. 6. 13世紀にはすでに、尚書部から保護状を得て活動した「外国人」商人や、都市当局の役職についた「外国人」などもみられたが、オームロッドらは、13世紀末から、尚書部によってより組織的に「外国人」向け文書が作成されるようになったと主張する。
- 14 Ibid., p. 7.

14世紀後半から、「外国人」の中には、イングランド王に忠誠を誓い、代金を支払ってデニゼーション開封書状 (letters of denization) を尚書部から得る人々が現れた¹⁶。デニゼーション開封書状を得ると「イングランド人と同じように」土地を保有し裁判所で訴えることが認められるとされ、この開封書状はそれまでの保護状とは異なる性質を持つとオームロッドらは主張する¹⁷。しかし、この開封書状が、それを手にした人々にとって、実際にどのような意味をもつものだったのかについては議論の余地がある¹⁸。

また1439～40年の議会において、「外国人」臨時税（議会記録ではSubsidia di alienigenis）の導入が決まった。この時の議会記録では、課税対象者は「イングランド出身でなく、イングランド王国に暮らす人」とされ、自家保有者（householder）は年16ペンスを支払うことと記された。そしてウェールズ人およびデニズンとされた人（デニゼーション開封書状を得た人）は対象から外された¹⁹。また、議会の記録からは、自家保有者でない人（non-householder）の課税額は年6ペンスであったこと、課税対象外となったのは、上記の人々に加え、イングランド人かウェールズ人と結婚した「外国人」女性、12歳以下の子ども、離俗聖職者であったことが分かる。しかし、税額査定においては、デニゼーション開封書状を取得していても課税対象とされた例がみられる²⁰。査定人の判断により、課税対象となる「外国人」の範囲が変わったのである。

また、「外国人」臨時税は1487年まで徴収されたが、課税対象者の範囲や税額は、数回にわたって変更された。たとえば、アイルランド人は1440年の臨時税では課税対象だったが、その後、課税対象から外されることになったし、イタリア諸都市出身者の多くも、1483年の税額査定では課税対象から外された。ハンザ商人は、1440年の臨時税導入当初は課税対象になっていたが、その後すぐに対象外となった。また「外国人」引受人による調査報告書（The Views of the Hosts）の対象からは、ハンザ商人は最初から外されていた²¹。

15 Bradley, H. ed., *The Views of the Hosts of Alien Merchants 1440-1444*, London Record Society (London, 2012), p. x.

16 Ormrod and Mackman, 'Resident Aliens in Later Medieval England: Sources, Contexts, and Debates', p. 7.

17 Ibid., p. 7; Ormrod, Lambert and Mackman, *Immigrant England*, p. 47.

18 史料に関する詳細は以下を参照。佐々井真知「中世後期ロンドンの『外国人』に関する史料について」『中部大学人文学部研究論集』37号(2017)、pp. 71-91.

19 議会記録の該当箇所は以下の通り。'That is to say, that every persone householder not English borne, dwelling withynne this your said reame, men and women borne in Wales, and other made denizens except afore except, paie to yowe yerely xvj d.' Brand, P., Phillips, S., Ormrod, W. M., Martin, G., Given-Wilson, C., Curry, A. and Horrox, R. eds., *The Parliament Rolls of Medieval England, 1275-1504* (Woodbridge, 2005), vol. xv, p. 253.

20 Ormrod, Lambert and Mackman, *Immigrant England*, p. 47.

「外国人」に関する情報は、上に示した史料群に記録されたが、そのつど、「外国人」が指し示す範囲は異なっていた可能性がある。「外国人」研究にあたっては、その範囲が変動するものであったことを認識しておくことが重要である。

1.2 England's Immigrants データベースとそれを利用した研究

「外国人」臨時税の税額査定や開封書状等の史料に登場する「外国人」の個人データを集めたものが、2015年に公開された England's Immigrants データベースである。このデータベースでは、姓名、出身地、居住地、職業、史料の種類などから検索を行うことができる。計64000件を超える「外国人」の情報が収集されたという点で、このデータベースは、中世イングランドにおける「外国人」についての量的研究の成果といえる。

しかし、この England's Immigrants データベース使用には注意が必要である。まず、同姓同名の人物が複数の史料に出てくる場合、同一人物かどうかの判定はせず、別々のデータとなっている。そのため、このデータベース検索により得られる数字は「外国人」数ではなくデータの件数となる。

また、このデータベースに示された「外国人」の出身地の読み取り方にも注意が必要である。史料では、広い地域を指す語から都市名まで、様々な言葉で「外国人」の出身地が示されたため、それがデータベースに影響を与えているのである。たとえば、大陸低地地方・ドイツ出身者を指して用いられた Doche という語がある。この語は、もともとは、中世オランダ語および中世低地ドイツ語として知られる言語の話者を指したとされる²²。データベースでは、Doche は 'Dutch' と統一され、引用符を付けることで現代の意味とは異なることを示しているようだが、本稿では史料で頻繁に書かれた Doche という語で示すこととする。Doche とほぼ同じ意味で使われたのが、ロンドンの1483年の税額査定で使われた Teutonic である。ボルトンは1483年の税額査定記録を刊行した際、この語を German と訳しているが、データベースでは史料上の表記 Teutonic が採用されており、本稿もそれに従う。またドイツ出身者を指して使われた史料上の語には Alman もあり、これはデータベースでは、引用符付きで 'German' とされた。さらに、ハンザ商人を指して用いられることの多かった Easterling という語もあり、データベースでは、この語はそのまま表記されている。このように、史料上の表記にばらつきがあるため、結果としてデータベースの表記ルールが分かりにくくなっている。England's Immigrants データベースは、「外国人」研究を行う際の出発点として重要なものであるが、注意深く扱う必要があるといえよう。

「はじめに」でも述べたように、最近、England's Immigrants プロジェクトに関わった研究者たちによる研究成果が公表されてきている。たとえば、F. グイディーブルスコリと J.

21 Bradley, ed., *The Views of the Hosts of Alien Merchants 1440-1444*, p. xi.

22 Ormrod, Lambert and Mackman, *Immigrants England*, p. 103.

ラトキンによるイタリア人共同体に関する研究²³、コワレスキによるフランス語話者に着目した研究などがある²⁴。これらの論文の著者たちは、データベースから「外国人」グループの情報を取り出し、それを整理し直した上で、個別事例の検討を行った。また、コワレスキはエクセターにおける「外国人」についてのプロソポグラフィカルな研究も行ったが、その際、England's Immigrants データベースの情報を整理して独自のデータベースを作成したという²⁵。その上で、コワレスキは、エクセターの史料群を調査し、「外国人」が市民となった例や都市当局の役職に就いた事例を示している²⁶。なお、コワレスキは、この論文において「イングランドの外から来た、英語を第一言語としない人々が、エクセターの住民としてイングランド人の隣人と同じように扱われるようになっていく過程」を「融合・同化」と呼んでいる²⁷。コワレスキが指摘したように、「外国人」について考察する際には、言語についても考慮することが重要となるだろう。

England's Immigrants プロジェクトに関わった研究者以外では、先述したデイヴィスの2019年の論文がある。デイヴィスは、今後の「外国人」研究に向けて、当該データベースの情報から浮かび上がってくる傾向を押さえておくことは重要であると述べる²⁸。デイヴィスはデータベースを使ってロンドンにおける「外国人」分布を概観した上で、金細工師ギルドと仕立商ギルドの規約・議事録から、市民たちの「外国人」に対する対応を検討した。ロンドンの金細工師ギルドに関しては、佐々井真知が、規約の詳細な分析を行っている²⁹。

最近では、England's Immigrants データベースから得られる情報を整理し、他の史料群と

23 Guidi-Bruscoli, F. and Lutkin, J., 'Perception, Identity, and Culture: The Italian Communities in Fifteenth-Century London and Southampton Revisited', in *Resident Aliens in Later Medieval England*, pp. 89-104.

24 Kowaleski, M., 'French Immigrants and the French Language in Late-Medieval England', in Fenster, T. and Collette, C. P. eds., *The French of Medieval England: Essays in Honour of Jocelyn Wogan-Browne* (Woodbridge, 2017), pp. 207-24.

25 Kowaleski, M., 'The Assimilation of Foreigners in Late Medieval Exeter: A Prosopographical Analysis', in *Resident Aliens in Later Medieval England*, pp. 163-79.

26 Ibid., pp. 175-77. 他の都市についても、以下のような研究が行われてきている。Liddy, C. D. and Lambert, B. 'The Civic Franchise and the Regulation of Aliens in Great Yarmouth, c. 1430-1490', in *Resident Aliens in Later Medieval England*, pp. 125-43; 梁川洋子「中世後期の港湾都市プリストル」『関西大学西洋史論叢』20号(2018), pp. 34-47.

27 Kowaleski, M., 'The Assimilation of Foreigners in Late Medieval Exeter: A Prosopographical Analysis', p. 163.

28 Davies, 'Aliens, Crafts and Guilds in Late Medieval London', p. 120.

29 佐々井真知「中世後期ロンドンの金細工師ギルドと「外国人」—規約に注目して—」『人文学部研究論集』43号(2020) pp.71-97.

合わせて利用することで、「外国人」の活動や、イングランド社会との接点を明らかにする試みが行われはじめている。

2. 15世紀ロンドンの「外国人」

2.1 「外国人」の出身地と居住地

ここから、England's Immigrants データベースと、他の先行研究を利用して、ロンドンにおける「外国人」の概要を見ていく。データベースからは1330年～1500年の間に、ロンドンに居住した「外国人」の情報として、17242件が検出される。1330年～1400年に34件、1401年～1500年に17208件である³⁰。

本稿では、データが多く残っている15世紀について見ていく。データベースによると、15世紀ロンドンの「外国人」情報が得られる史料は以下の通りである。1436～37年に大陸低地地方出身の人々がイングランド王に対して忠誠の誓いを行った記録324件、「外国人」臨時税の税額査定16821件、在留認可状 (license to remain) 40件、デニゼーション開封書状20件、保護状3件である。このうち保護状には出身地の詳細は記されていないが、それ以外の史料では「外国人」の出身地が示されたこともあったため、データベースから分かる出身地について、まず整理する。

1436年と1437年の開封書状録に残るのが、イングランド王に忠誠を誓った人々の記録である。1435年にイングランドとブルゴーニュの同盟関係が解消された後、イングランドに住んでいた低地地方出身者たちは、故郷に戻るかイングランド王に忠誠を誓うかを選ぶこととなった³¹。1436年から翌年にかけて、イングランド王に忠誠を誓った人々1800人以上の名前が開封書状録に記録されており、ロンドンの324人もそこに含まれている³²。

また、デニゼーション開封書状は20件あり、スコットランドやイタリア諸都市、フランドル諸都市などの出身者に向けて作成されていた。在留認可状40件のうち、30件はスコットランド人、3件はウェールズ人、2件がアイルランド人、2件がセビリア出身者のものであり、残りの3件は出身地が記されていない。

15世紀の「外国人」記録で最も多いのは税額査定記録であり、延べ16821件ある。そこに最も多く登場するのが、ドイツ・大陸低地地方出身者である。その中ではTeutonicと記された人々が1282件と最も多い。Teutonicは、1483年の税額査定においてのみ使われた語

30 England's Immigrants 1330–1550 : Resident Aliens in the Late Middle Ages (<https://www.englishimmigrants.com/>, 2019年12月20日参照).

31 Barron, C., 'Introduction: England and the Low Countries', in Barron, C. and Saul, N., eds. *England and the Low Countries in the Late Middle Ages*, (Stroud, 1995), pp. 1-28, esp. p. 13.

32 324人中319人は、1436年4月18日付の記録に名前が挙げられている。*Calendar of the Patent Rolls preserved in the Public Record Office, Henry VI*, vol. ii, 1429-1436 (1907), pp. 549-88.

である。1483年の税額査定は、出身地や居住地、職業など、情報量が特に多い史料である。また、先述のように、Teutonicとほぼ同じ意味で使われたDocheは、1483年以外の税額査定記録から、334件見つかる。それとは別に、フランドル（54件）、ブラバント（38件）、ゼーラント（35件）、ホラント（34件）などの地域名が記された例もある。さらに、データベースでは‘German’のデータが75件確認されるが、ここには史料でAlmanと書かれた人々と、ケルンやアンダーナッハなどの都市名が記された人々の情報が含まれる。またEasterlingと書かれた人々のデータが36件ある。Easterlingとは、先述のように主としてハンザ商人を指して用いられた語であり、データベースでは姓がEasterlingである人々もここに含まれている。ハンザ商人は、「外国人」臨時税の対象から外されていても、課税対象者としてリストアップされることがあったようである。

ドイツ・大陸低地地方出身者の次に、税額査定記録で多く見つかる「外国人」グループは、イタリア人（1156件）であった。「イタリア人」とのみ記された例が458件と最も多く、ジェノヴァ人が236件、ヴェネツィア人が199件、フィレンツェ人が152件、ルッカ人が61件、「ロンバルディア人」が41件などとなっている。

税額査定記録では、他に、スコットランド人は251件、フランス人は216件見つかる。ガスコーニュ、ブルターニュなどの地域名が書かれた例もある。アイルランド人やアイスランド人、海峡諸島出身者、イベリア半島出身者などもみられた。また、1483年にビショップスゲイト市区の税額査定で記録されたベネディクトゥス・カラマン（Benedictus Calaman）とその妻アントニア（Antonia）には、出身地を示して‘de Inde’と書かれている³³。彼らが実際にどこから来たのかは分からないが、中世において‘Inde’とは聖地イェルサレムよりもさらに東方を指して用いられた語であったと言われる³⁴。

以上のことから、ロンドンには様々な土地から「外国人」がやってきていたことが分かるが、データベースにおいて大部分を占めているのは、大陸低地地方・ドイツ出身者であった。ただし、一口に大陸低地地方・ドイツ出身者といっても、異なる地域から来た人々が含まれる。それぞれの特徴については、別の史料を用いて検討していく必要があるだろう。その次に多かったのがイタリア人であり、スコットランド人とフランス人の情報もそれぞれ200件以上確認された。

彼ら「外国人」はどこに住んだのか。データベースの税額査定記録からは、ロンドンの25市区の全てにおいて「外国人」が記録されたことが分かる。最も多くの「外国人」が記録されたのは、市内中心部のラングボーン（Langbourne）市区であり、1014件の記録が残る。その次に「外国人」の記録が多かったのは、市内の東側、ロンドン塔近くのタワー

33 税額査定では職業は記録されていないが、自家保有者ではなかったことが分かる。Bolton ed., *The Alien Communities of London in the Fifteenth Century*, p. 69; Ormrod, Lambert and Mackman, *Immigrant England*, p. 190.

34 Ormrod, Lambert and Mackman, *Immigrant England*, p. 190.

(Tower) 市区で798件、西側の市壁外に広がるファリンドン・ウィズアウト (Farringdon Without) 市区で730件である。他に400件以上の「外国人」情報が確認される市区は以下の通りである。北西部の市壁外に広がるクリップルゲイト (Cripplegate) 市区に582件³⁵、テムズ川沿いのダウゲイト (Dowgate) 市区に494件、ロンドン塔近くのオールドゲイト (Aldgate) 市区に431件、東の市壁外に位置したポーツソケン (Portsoken) 市区に491件であった。上に挙げた市区のうち、ファリンドン・ウィズアウト市区とクリップルゲイト市区は面積も大きかったため、デイヴィスは、市区の面積を考慮に入れると「外国人」が比較的多く住んだ市区は、市内東側から中心部にあったと述べている³⁶ (市区の位置については地図を参照)。

2.2 イタリア人の居住地

次に、「外国人」の出身地ごとに居住地を見ていきたい。「外国人」情報が最も多く確認されたラングボーン市区における「外国人」の内訳を見ると、イタリア諸都市出身者が最も多く146件である。ラングボーン市区にはロンバード・ストリート (Lombard Street) という通りがある。16世紀末に『ロンドン探訪』(*The Survey of London*) を書いたジョン・ストウは、エドワード2世期以来、この通りにフィレンツェ商人が会合に使う建物があったと述べる³⁷。また、ロンドンのイタリア人の遺言書60通を分析したヘレン・ブラッドリーは、1400年のルッカ商人ニコラス・ダマスク (Nicholas Damask) の遺言書から、彼がこの場所に家屋を有していたこと、その時点でこの通りが既にロンバード・ストリートと呼ばれていたことを確認している³⁸。ブラッドリーによれば、この地区に家屋を持ったイタリア人の例は他にもみられる³⁹。

またブラッドリーによれば、遺言書に書かれた埋葬場所で最も多かったのは、アウグスティヌス托鉢修道会であった。ブロード・ストリート市区にあったアウグスティヌス托鉢修道会は、シルビア・スラップの論文においても「外国人」との結びつきが指摘された場である⁴⁰。データベースでは、ブロード・ストリート市区でイタリア人が130件記録されており、ラングボーン市区に次いで多くのイタリア人情報がみられる。他の市区では、いずれもイタリア人のデータ件数は50件未満となっている。ラングボーン市区とブロード・

35 England's Immigrants データベースでは、税額査定時の記録方法が年によって異なったため、クリップルゲイト市区と、クリップルゲイト・ウィズインおよびウィズアウト市区とでデータが別々になっている。本稿では15世紀全般の傾向を見るために合算した。

36 Davies, 'Aliens, Crafts and Guilds in Late Medieval London', p. 128.

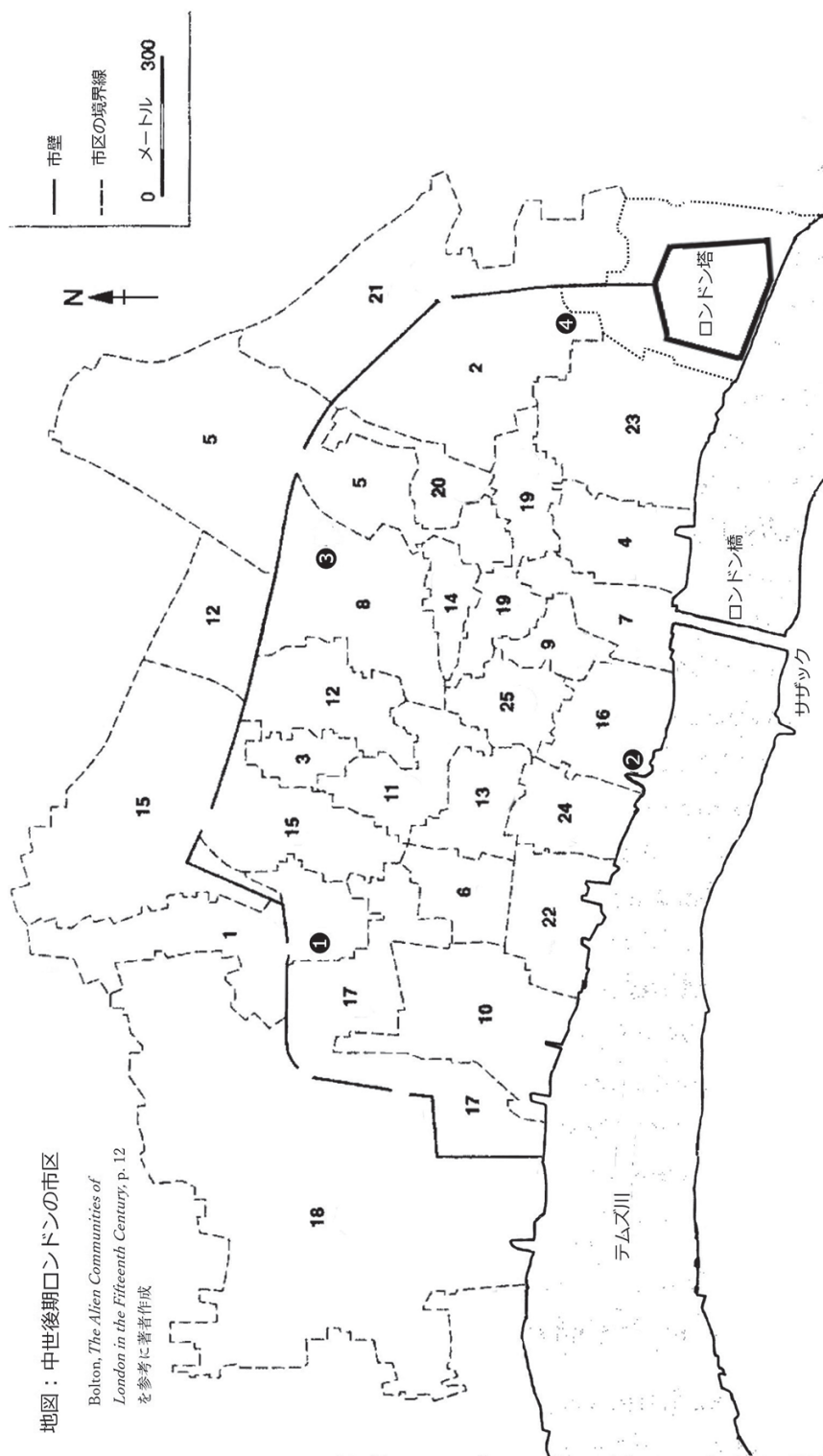
37 Kingsford, C. L. ed., *A Survey of London: Reprinted from the Text of 1603* (Oxford, 1908), pp. 200-201.

38 Bradley, H., 'Italian Merchants in London c 1350-1450', Unpublished PhD thesis, Royal Holloway and Bedford New College, University of London (1992), p. 13.

39 Ibid., p. 21.

地図：中世後期ロンドンの市区

Bolton, *The Alien Communities of London in the Fifteenth Century*, p. 12
を参考に著者作成



「外国人」と関わりの深い場所 ①聖マーティン・ル・グラン共住聖職者教会 ②ステイールヤード ③アウグスティヌス托鉢修道会 ④十字架会

市区	1 Aldersgate	6 Bread Street	11 Cheap	16 Dowgate	21 Portsoken
	2 Aldgate	7 Bridge	12 Coleman Street	17 Farringdon Within	22 Queenhithe
	3 Bassishaw	8 Broad Street	13 Cordwainer Street	18 Farringdon Without	23 Tower
	4 Billingsgate	9 Candlewick Street	14 Cornhill	19 Langbourn	24 Vintry
	5 Bishopsgate	10 Castle Baynard	15 Cripplegate	20 Lime Street	25 Walbrook

ストリート市区にイタリア人がある程度まとまって住んでいたといえるだろう。

また、イタリア人で職業が記された人々のうち約78%が商人 (merchant) と書かれている。先行研究では、イングランドにきたイタリア人のほとんどが商人か銀行家だったと指摘されており、一都市には短期間しか滞在しなかった人が多いとされる⁴¹。ロンドンに長期滞在するイタリア人が少なかったことは、税額査定の時に記録されたイタリア人の多くが、その後移動してしまい、徴税されなかったことから分かる⁴²。また、女性は1件しか記録されなかった。15世紀ロンドンのイタリア人は、多くが男性の商人であり、家族でロンドンに暮らす人は少なかったと推察される⁴³。

2.3 大陸低地地方・ドイツ出身者の居住地

イタリア人とは対照的な居住地の特徴を見せるのが、大陸低地地方・ドイツ出身者であった。ここではTeutonicおよびDocheとされた人々の情報1616件を取り上げる⁴⁴。彼らの情報が最も多く確認されたのは東の市壁外に広がるポーツツケン市区で、213件であった。ポーツツケン市区には、イタリア人の情報は1件もみられなかった。その次に大陸低地地方・ドイツ出身者が多かったのはダウゲイト市区で、186件である。テムズ川沿いに位置するダウゲイト市区には、ハンザ商館スティールヤードがあった。

ステュワート・ジェンクスによるロンドンのハンザ商人の遺言書研究では、対象とされた33人の遺言者のうち、スティールヤードのそばにあったオール・ハロウズ・グレート教区教会への埋葬希望者が17人と最も多く、アウグスティヌス托鉢修道会への埋葬希望者が7人とそれに続いている⁴⁵。ハンザ商人は、イタリア人とは異なり、ダウゲイト市区にあった教区教会とも繋がりを持っていたことが分かる。シルビア・スラップによるDocheの遺言書分析でも、教区教会への埋葬を希望する人がイタリア人に比べて多かったことが指摘されている⁴⁶。

40 Thrupp, S. L., 'Aliens in and around London in the Fifteenth Century', in Hollaender, A. E. J. and Kellaway, W. eds., *Studies in London History Presented to P. E. Jones* (London, 1969), pp. 251-72, esp. p. 263.

41 Guidi-Bruscoli and Lutkin, 'Perception, Identity, and Culture: The Italian Communities in Fifteenth-Century London and Southampton Revisited', p. 92.

42 Ibid., p. 92.

43 Ibid., p. 99. 少数ではあるがロンドンやサウサンプトンに長期滞在したイタリア人もおり、イングランド人と結婚した例もみられる。

44 Easterling, 'German'、フランドル人、ブラバント人など、出身地別にデータベース検索を行ったが、居住地にはこれといった特徴はみられなかった。

45 Jenks, S., 'Hansische Vermächtnisse in London: ca. 1363 – 1483', *Hansische Geschichtsblätter*, vol. 104 (1986), pp. 35-111.

他に、大陸低地地方・ドイツ出身者の記録が多かったのは、イタリア人も多く居住したラングボーン市区やテムズ川沿いのビリングスゲイト市区、ロンドン塔近くのタワー市区およびオルドゲイト市区、さらに西側の市壁外のファリンドン・ウィズアウト市区であった⁴⁷。オルドゲイト市区には十字架会（Crutched Friars）修道院があり、Docheの兄弟会が置かれていたことが分かっている⁴⁸。また、市壁外に位置したポーツソケン市区とファリンドン・ウィズアウト市区には、イタリア人の情報は1件もみられなかった。

このような居住地の分布は、彼らの職業とも関わっていた可能性がある。大陸低地地方・ドイツ出身者のうち、職業が記録されている人の約67%がservantであった。彼らは、使用人あるいは徒弟や渡りの職人であったと推察される。Servant以外に20件以上確認される職業は、靴職人、帽子職人、金細工師であり、商人は16件にとどまった。デイヴィスが述べるように、金融・商業の中心であった市内中心部に比べて、市壁外に広がる市区は、servantや職人であった「外国人」たちが、住む場所や職を比較的容易に得ることができる地区だったのかもしれない⁴⁹。テムズ川対岸のサザックでも大陸低地地方・ドイツ出身者であるDocheが「外国人」の大半を占めており、Docheの約66%がservantであったことが分かっている⁵⁰。またサザックにおいても、servant以外の職業としては職人が多く記録された。

また、大陸低地地方・ドイツ出身者のデータとしては、男性1174件に加えて、女性の記録が441件あり、女性のservantも記録されている⁵¹。1483年の税額査定で、コードウェイナー・ストリート（Cordwainer Street）市区で記録されたTeutonicのキャサリン・コーネリス（Katherine Cornelis）とエリナ・ニール（Elena Nele）は、同じくTeutonicの靴職人レギナルド・エブソン（Reginald Egbson）のservantと記されており、使用人であったものと推察される。また、世帯主との関係性が示された場合があり、妻195件、娘10件、寡婦10件、母7件のデータがみられる。単身者が多かったと推察されるイタリア人と比べて、大陸低地地方・ドイツ出身者の中には、家族でロンドンへ移動してきた人々や、ロンドンで家族となった人々が多かったといえるだろう。

他のグループとして、スコットランド人、フランス人についても見ておく。England's Immigrants データベースからは、スコットランド人の情報は市壁外の市区に比較的多かつ

46 Thrupp, 'Aliens in and around London in the Fifteenth Century', p. 268.

47 データ件数は以下の通り。タワー市区157件、ラングボーン市区142件、オルドゲイト市区83件、ファリンドン・ウィズアウト市区79件、ビリングスゲイト市区75件。

48 Colson, J., 'Alien Communities and Alien Fraternities in Later Medieval London', *The London Journal* 35-2(2010), pp. 111-143.

49 Davies, 'Aliens, Crafts and Guilds in Late Medieval London', p. 131.

50 Ibid., p. 134; Carlin, M., *Medieval Southwark* (London, 1996), pp. 151-52.

51 England's Immigrants データベースでは、他に、性別不明の記録が1件あった。

たことが分かる。また、フランス人は市内中心部のチープ市区で比較的多く記録が残っている。いずれも、職業が書かれている人々の中では servant が多く、女性も記録されていた。しかし、スコットランド人、フランス人ともに、職業や居住地が分からない人々が多く、分布を見るには情報量が不十分である。他の史料と合わせて検討していく必要があるだろう。

むすびにかえて

本稿では、England's Immigrants データベースから、15世紀ロンドンにおける「外国人」の概要をまとめた。おおまかな出身地別に居住地を見ると、イタリア人は、市内中心部のラングボーン市区とブロード・ストリート市区に多く居住していたことが分かる。その一方で、大陸低地地方・ドイツ出身者は市内全域で確認されたが、ハンザ商館スティールヤードのあるダウゲイト市区や、市壁の外に広がる市区に比較的多くの人々が居住したといえる。このような傾向は、これまでにロンドン史研究において論じられてきたことと、概ね合致するといえる。たとえばキャロライン・バロンは、イタリア人が都市の中心部に、ハンザ商人がテムズ川沿いに多く居住するという傾向は、13世紀から15世紀まで継続的にみられたと述べている⁵²。ただし、England's Immigrants データベースにみられる大陸低地地方・ドイツ出身者の中には、ハンザ商人は少数しか確認されていない。彼らは「外国人」臨時税を免除されたことが多かったためである。それでも、ダウゲイト市区では、多くの大陸低地地方・ドイツ出身者が servant として働いていたことが明らかになった。また、大陸低地地方・ドイツ出身者には、女性も多かった。今回は「外国人」の概要を見ることを重視したが、今後は、職業や社会的立場の違いにも着目して、より具体的に「外国人」の活動について明らかにしていきたい。

また、England's Immigrants データベースからは見えてこない「外国人」の情報もある。たとえば、ロンドン市内の聖マーティン・ル・グラン共住聖職者教会の聖域には、15世紀から16世紀前半にかけて大陸低地地方・ドイツ出身の職人たちが暮らしていたとされる。Evil May Day と呼ばれる1517年の反「外国人」暴動の際には、この聖域に暮らす「外国人」も標的となった⁵³。しかし、15世紀の税額査定記録からは、この聖域における「外国人」は見えてこない。データベース作成に使われた史料群の他に、都市当局の記録や、同職ギルドの記録、年代記の記述などを見ていく必要があるだろう。また、遺言書や「外国人」兄弟会の規約など、「外国人」の残した記録もある。今後は、これらの史料を利用することで、「外国人」がロンドン社会にどのように接したのか、考察していきたい。また、

52 Barron, C., *London in the Later Middle Ages: Government and People 1200-1500* (Oxford, 2004), p. 97.

53 McSheffrey, S., "Stranger Artisans and the London Sanctuary of St. Martin le Grand in the Reign of Henry VIII", *Journal of Medieval and Early Modern Studies* 43-3(2013), pp. 545-71.

中世ロンドンの「外国人」嫌悪が強調されることもあるが、「外国人」というカテゴリーは常に変動していたし、ロンドンの「外国人」とイングランド人の間にはいつでも対立が見られたわけではない。二項対立の構図で考えるのではなく、「外国人」とロンドン社会との多様な接点を、上に挙げた史料群から明らかにしていくことが重要なのではないだろうか。

‘Aliens’ in Fifteenth Century London: Their Origins and Residences

Mio Ueno

Medieval London attracted many people and goods from around the British Isles and continental Europe. According to the study by J. L. Bolton, approximately 3500 ‘aliens’ lived and worked in fifteenth century London - about six percent of the city’s population at the time.

After discussing recent trends in ‘alien’ studies, I would like to present a basic picture where of ‘aliens’ lived, where they came from and what they did for a living in medieval London.

The “England’s Immigrants 1330-1550: Resident Aliens in the Late Middle Ages” project collected over 64000 records of ‘aliens’ from various documents, such as alien subsidy rolls and letters of denization. Subsequently, the “England’s Immigrants Database” has been made accessible to the public in 2015.

Searching “England’s Immigrants Database” yields 17208 records of ‘aliens’ from fifteenth century London. The largest number of ‘aliens’ lived in Langbourne ward, which was in the centre of the city. Also, ‘aliens’ tended to live in central to eastern wards.

The largest ‘alien’ group in Langbourne ward was Italian, almost all of whom were recorded as being merchants, and were male only, which is a sharp contrast with the ‘Teutonic’ or the ‘Dutch’, who came from northern Europe, mainly from the Low Countries and Germany. ‘Teutonics’ formed the largest group of ‘aliens’ in London, and women were also recorded in addition to men. Regarding their occupations, many of the ‘Teutonic’ were recorded as ‘servants’, and this included apprentice and journeymen as well as domestic servants.

Naturally, there are other groups of ‘aliens’ (e.g. French, Scots, Irish) but detecting clear patterns of their residence in London remains a challenge. However, in combination with other studies on ‘aliens’, it is possible to surmise that the differences found among ‘aliens’ in the database reflected their social status in London.